

# サンタクロースとクリスマス行事に対する大人の態度と支援

富田 昌平

Adults' attitude and the support for Santa Claus and the Christmas event

Shohei TOMITA

## 要 旨

本研究では、サンタクロースとクリスマス行事に対する大人の態度と支援について、2つの質問紙調査によって検討した。研究1では、大学生110名を対象に調査を行った結果、サンタクロースの実在性に対する信念は児童期中頃に肯定から否定へと大きく変化し、その発達変化は子どもに対する期待年齢でもほぼ同様であることが示された。また、サンタクロースの実在性について5歳児と12歳児に質問された場合の回答では、基本的にいずれの年齢の子どもに対しても肯定的回答をするものの、12歳児では5歳児と比較して逆質問（「あなたは どう思う？」）や信念重視（「信じる子どものもとに現れる」）の回答がわずかであるが増加した。研究2では、公立幼稚園・保育園104園を対象に調査を行った結果、クリスマス行事は一部「お楽しみ会」などに名称を変えながらもほとんどの園で実施されており、扮装サンタが子どもの目の前に登場する演出を行っていることが示された。また、扮装サンタ登場の是非については、子どもの夢を壊す可能性や恐怖誘発の可能性、宗教色の強さ、商業主義的傾向などのリスク要因が挙げられたものの、多くは肯定的意見であり、その理由として、サンタクロースやクリスマス行事が持つ象徴的意味合いや、想像世界への没入、経験の多様性、リアリティ感覚、幸福感情や驚異の念、異文化や地域社会との交流機会などを子どもに提供し得ることが指摘された。大人の多くはサンタクロースやクリスマス行事の積極的な意味を認め、肯定的な態度を示し、子どもの体験がより豊かになるように支援していることが示唆された。

【キーワード】 サンタクロース、クリスマス行事、大人、態度、支援

## 問題と目的

現在の我が国において、クリスマス・イヴの夜にトナカイの引く空飛ぶそりに乗って世界中の子どもたちにプレゼントを配って回るサンタクロースの存在を知らない者はほとんどいないであろう。クリスマスが近づくと街全体がきらびやかな装飾で溢れ、あちこちでクリスマス・ソングがひっきりなしに流れ、私たちは否が応にもサンタクロースの季節が近づいたことを知らされる。私たちは、全てではないものの、クリスマスを祝うケーキを購入し、ツリーの飾りつけを行い、子どもと一緒にクリスマス・ソングを歌いながら、密かに欲しいプレゼントを尋ね、それを用意し、クリスマス・イヴの夜に子どもが寝静まった頃、彼らの枕元にプレゼントを置く。そして翌日の朝、驚き喜び子どものそばでプレゼントを初めて見たかのような素振り

を見せて、ともにサンタクロースの訪問に感謝するのである。

このように、サンタクロースとクリスマス行事は、私たち日本人の生活に深く根付いており、大切にすべき年間行事の1つとして位置づいている。しかし見方を変えれば、サンタクロースは実在しない空想上の人物であり、そうした人物が子どもたちの中で実在する人物として根付くためには、子どもとともにそれが実在するかのごとくふるまい、ともに楽しみながらクリスマスの訪れを心待ちにする周囲の大人の存在が不可欠であることは言うまでもない。

サンタクロースに関する発達研究では、これまで実在性に対する信念の発達 (Prentice, Manosevitz, & Hubbs, 1978; Prentice & Gordon, 1986; 杉村・原野・吉本・北川, 1994; 富田, 2002) や大人による扮装物に対する本物/偽物判断の発達 (富田, 2002, 2009)、

保存課題に見られるような認知能力との関連 (Blair, McKee, & Jernigan, 1980; Prentice, Schmechel, & Manosevitz, 1979)、空想傾向との関連 (Boerger, Tullos, & Woolley, 2009; Sharon & Woolley, 2004; Woolley, Boerger, & Markman, 2004) などが中心的に検討されてきた。その結果、子どものサンタクロースに対する認識の発達について、かなり多くの知見が明らかにされてきたものの、子どもの親の奨励や支援については、子どもの実在性信念との関連 (Prentice et al., 1978; Rosengren, Kalish, Hickling, & Gelman, 1994) についての検討にとどまり、その詳細な内容については十分に検討されてきたとは言い難い。

そこで本研究では、サンタクロースとクリスマス行事に対する大人の態度と支援について、2つの質問紙調査をもとに検討する。まず、研究1では、大学生を対象に、サンタクロースを信じていた年齢に加えて、子どもに信じてほしい年齢や子どもにサンタクロースの実在性について質問された場合の回答の仕方について尋ねる。それにより、大人(大学生)は子どもがサンタクロースの実在性を信じることに對してどのような考えや態度を持っているのかについて明らかにする。次に、研究2では、公立幼稚園・保育園を対象に、園でのクリスマス行事の実施の有無や扮装サンタの登場の有無、扮装サンタの登場に対する是非などについて尋ねる。それにより、幼稚園・保育園ではサンタクロースとクリスマス行事をどのように位置づけ、どのようなことを大切にしながら子どものサンタクロースに対する認識を支援しているのかについて明らかにする。

## 研究1

### 方法

被調査者：C短期大学保育学科1年生110名(男性14名、女性96名；年齢範囲18~23歳)。

手続きと質問内容：「発達心理学」の授業時間内に質問用紙を配布し、記入を求めた後、回収した。質問内容は以下の通りであった。

質問1. あなたは子どもの頃の一時期、サンタクロースの存在を信じていましたか？

質問2. (質問1で「信じていた」と答えた人のみ) あなたは何歳頃までサンタクロースの存在を信じていましたか？

質問3. 5歳の子どもに「サンタクロースって本当はいないの？」と聞かれたとき、あなたはなんと答えますか？

質問4. 同じ質問を12歳の子どもにされたとき、あなたの回答は異なりますか？異なるのであれば、その回答をお書きください。

質問5. 子どもにはある時期までサンタクロースの存在を信じて欲しいと思いますか？思うとすれば、何歳頃まで信じて欲しいと思いますか？

### 結果と考察

子どもの頃にサンタクロースの実在性を信じていたか否か(質問1)に関しては、「信じていた」と回答した者は97名(88.2%)に上り、ほとんどの者が子どもの頃にサンタクロースを信じていたことが示された。他方、「信じていない」と回答した者は6名(5.5%)、「わからない」と回答した者は7名(6.4%)であった。

何歳頃まで信じていたか(質問2)に関しては、4歳から15歳、そして現在に至るまで幅広く分布した。図1は、結果を棒グラフと折れ線グラフで示したものである。棒グラフは年齢ごとの回答者の割合を示し、折れ線グラフは「信じていた」者の累積割合の推移を示したものである。図1に示すように、「信じていた」者の割合は7歳頃まで79%もいるのに対して、その割合はその後急速に減少し、10歳頃には22%まで落ち込むことが示された。この結果は、幼児・児童を対象にインタビューを行った先行研究の結果(Prentice et al., 1978; Prentice & Gordon, 1986; 富田, 2002)ともほぼ一致する。サンタクロースを信じていた者がやがて信じなくなるその契機は、8歳から10歳頃の児童期中頃に生じることがこの結果から示された。

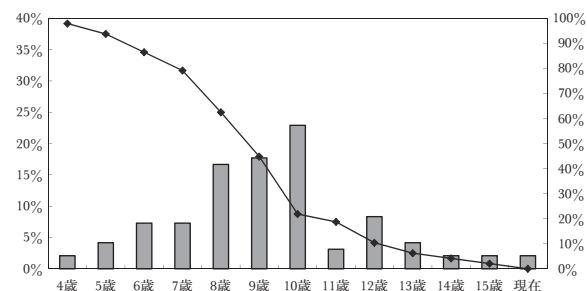


図1 サンタクロースをいつ頃まで信じていたか？(質問2)

「サンタクロースって本当はいないの？」という質問を5歳児にされた場合(質問3)と12歳児にされた場合(質問4)の回答に関しては、次の10のカテゴリーに分類された。①実在肯定(「いるよ」など)、②心的実在肯定(「目に見えないけど心の中にいるよ」など)、③信念重視(「信じる子どものもとに来ると思うよ」など)、④態度重視(「いい子にしてたら来ると思うよ」など)、⑤経験談(「私の時はね…」など)、⑥理由質問(「どうしてそう思うの？」など)、⑦逆質問(「○○ちゃんはどう思うの？」など)、⑧回答回避(「わからない」「答えられない」など)、⑨実在否定

(「いないよ」など)、⑩その他(上記9つのいずれにも含まれない回答)。

図2は、相手が5歳児の場合と12歳児の場合での各カテゴリーに含まれる回答の割合を比較したものである。図より、相手が5歳児でも12歳児でも「サンタクロースはいるよ」と実在肯定の回答をする者が最も多く、大部分は子どもにサンタクロースの存在を信じてほしいと考えていることがうかがえる。しかし、こうした回答には年齢差が見られ、相手が5歳児の場合と比べて、12歳児の場合には60%から47%まで減少することが示された。代わりに、逆質問(13%→23%)と信念重視(13%→17%)が増加することが示された。このことは、年齢が上がると子ども自身に考えさせて、考えを深めさせようとする大人側の意図や、信じることにそのものに価値を置いて考えることを深めさせようとする大人側の意図が働くようになるためと考えられる。

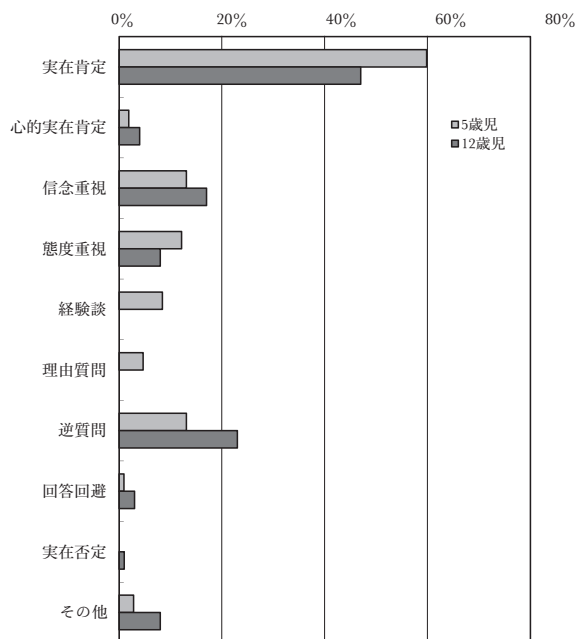


図2 「サンタクロースって本当はいないの?」と尋ねられたらどう答えるか? (相手が5歳児の場合と12歳児の場合の比較) (質問3と4)

子どもにサンタクロースを信じて欲しいと思う年齢(質問5)に関しては、5歳から13歳、そして現在に至るまで幅広く分布した。図1と同様に、「信じていて欲しい」者の割合は7歳頃まで84%もいたのに対して、その割合はその後急速に減少し、10歳頃には29%まで落ち込むことが示された。特に、信じていて欲しい年齢として10歳頃を挙げる者が多く見られた(32%)。10歳は10代に足を踏み入れる年齢であり、ゆえにサンタクロースともお別れし、子ども時代に徐々に終わりを告げる時期として見なされやすかったのかもしれない。

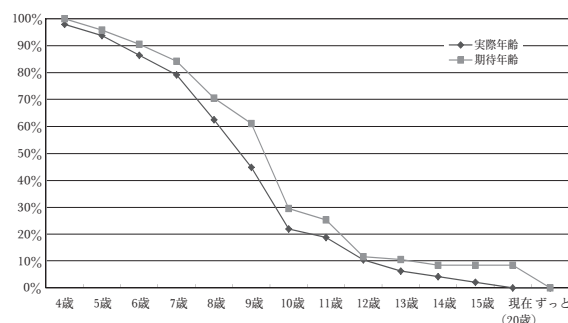


図3 信じていた年齢(実際年齢)と信じていてほしい年齢(期待年齢)との差異(質問2と5)

前述の質問2ではサンタクロースを信じていた実際年齢を尋ねていたのに対して、質問5ではサンタクロースを信じていて欲しい期待年齢を尋ねている。この実際年齢と期待年齢との間にはどの程度の開きがあるのかを検証するために、図3の折れ線グラフを作成した。いずれの年齢でも期待年齢が実際年齢を上回っていることが分かるが、その推移の仕方はほぼ同様であり、自らのサンタクロース体験と重ね合わせるように、自分と同様かそれ以上の道筋を子どもたちにも味合わせたいと願っていることがうかがえる。

## 研究2

### 方法

調査対象園と手続き: 広島県及び山口県における公立幼稚園80園、公立保育園80園、計160園に質問紙を郵送し、回答を依頼した。その結果、計104園より回収され、回収率は65%であった。

質問内容: 以下の質問について園長(または副園長、主任)に回答を求めた。

質問1: 「クリスマス会を実施していますか?」(実施している/実施していない)

質問2: 「クリスマス会の実施時期はいつ頃ですか?」(11月/12月上旬/12月中旬/12月下旬)

質問3: 「クリスマス会では大人の扮装したサンタクロースが園児の前に現れるといったことはありますか?」(ある/ない)

質問4: 「園児のクリスマス気分を盛り上げるために事前になんらかの予備的な設定を行っておられますか?」(している/していない)

質問5: 「行っている場合、それはどのようなものですか? また、園児の反応はいかがですか?」(自由記述)

質問6: 「クリスマス会を行わない理由はどのようなものですか?」(自由記述)

質問7: 「大人の扮装したサンタクロースが子どもの

目の前に現れるということはどう思われますか？」  
(賛成／どちらともいえない／反対)

質問8:「それについてももしも理由がございましたら  
お書きください」

### 結果と考察

選択形式の質問(質問1、2、3、4、7)に対する回答結果を表1に示した。

クリスマス会の実施の有無(質問1)に関しては、調査を行った公立幼稚園・保育園のほとんどがクリスマス会を実施しており(63.5%)、クリスマス会を行わない場合でも、別の名称によってほぼ同様の内容の園行事を行っている園が多数見られた(34.6%)。具体的には、「お楽しみ会」(28園)、「生活発表会の一部として実施」(4園)、「誕生会の一部として実施」(1園)、「サンタパーティー」(1園)、「サンタさんとの集い」(1園)、「みんなで集まっての会食」(1園)が挙げられた。今回の調査ではあらかじめ「別の名称で実施している」という選択肢を設けていなかったため、潜在的にはもっと多くの園がクリスマス会ではなく別の名称で実施している可能性も考えられる。

名称を変更している理由としては、「公立幼稚園として、宗教に関する内容はクリスマス会と称していない」「クリスマスはもともと宗教行事なのだと考える」「宗教的などころもあるので、クリスマス会とせずに『お楽しみ会』としている」「宗教にかかわるようになるので(宗教色が強くなりがちになる)、特に会を開

くに当たり意識統一しておく」「クリスマス会については、公立園ということもあり、名前をサンタパーティーにして宗教色をなるべく控えるようにしています」など、公立園という立場から宗教的中立性を維持する必要性があることを理由に挙げる園がほとんどであった。

また、クリスマス会を実施していないという園も、2園(1.9%)のみであるが確認された。実施しない理由(質問6)に関しては、「公立の幼稚園であるため。各家庭いろいろな宗派があり、クリスマス会をすることに反対もある」「公立幼稚園という立場にあること」が挙げられた。ただし、後者の園では理由説明に続けて「基本的にサンタクロースという子どもの夢は尊重し、リース作りやツリーなど、雰囲気作りはしています。しかし、本来子ども一人ひとりのサンタクロースに対する夢は違いますので、『サンタさんはどこにいるの?』と尋ねられれば、それに見合った絵本等を読み聞かせたり、『玄関にサンタさんへの手紙を書いた返事が来たよ!』という子どものつぶやきから、学級全体の『サンタさんへの手紙づくり』に発展することもあります。『夢』を大切に育み、あまり急いで答えを出したくないというのが本園の基本的な考え方です」とあり、子どもによるサンタクロース体験やクリスマス行事そのものに反対ではないことがうかがえた。また、この園では質問8の自由記述欄においても、「基本的な考え方は先に述べた通りですが、その年、その子どもたちの状況や発達過程により対応しています」とあり、大人の側で「絶対にしない」と

表1 クリスマス会行事と大人が扮装したサンタクロースに関する質問の回答結果

質問内容	回答内容	人数	%
Q1 クリスマス会の実施の有無 (N=104)	実施している	66	63.5%
	別の名称で実施している	36	34.6%
	実施していない	2	1.9%
Q2 クリスマス会の実施時期 (N=102)	11月	0	0.0%
	12月上旬	2	2.0%
	12月中旬	70	68.6%
	12月下旬	26	25.5%
	無回答	6	5.9%
Q3 扮装サンタの登場の有無 (N=102)	登場している	93	91.2%
	登場していない	6	5.9%
	無回答	3	2.9%
Q4 予備の設定の有無 (N=102)	している	94	92.2%
	していない	3	2.9%
	無回答	5	4.9%
Q7 扮装サンタの登場の是非 (N=104)	賛成	80	76.9%
	どちらともいえない	3	2.9%
	反対	16	15.4%
	無回答	5	4.8%

するのではなく、子どもの思いや要求を受け止めながら、園行事の在り方を考えていく姿勢のようであった。

実施の時期（質問2）に関しては、表1に示すように、大部分が12月中旬（68.6%）か下旬（25.5%）に行っていた。11月や12月上旬の実施が避けられた理由としては、12月24日のクリスマス・イヴから時期的にあまり離れ過ぎるとクリスマス行事として違和感があり、また雰囲気作りも困難であるためと考えられる。また、12月中旬の実施に関しては、特に12月下旬から冬休みに入る幼稚園側の意見として多く見られた。さらには、後述するように、サンタクロースの扮装をしてくれる地域の協力者との日程調整も関係しているようであった。

予備の設定（質問4）に関しては、大部分の園で行われており（92.2%）、その内容についても表2に示すように、絵本、紙芝居、お話し、飾り付け、製作、歌、劇遊びなど様々であった。また、子どもたちの様子は期待感や喜び、楽しさ、興味、ワクワクドキドキなど、肯定的な感情が多く報告され、園でのクリスマス行事本番に向けて子どもたちが仲間同士でイメージや感情を共有しながら、気分や雰囲気を盛り上げていくにあたって、保育者による様々な予備的な設定や取組が大きな役割を果たしていることがうかがえた。

扮装サンタの登場の有無（質問3）に関しては、表1に示すように、大部分の園で登場しており（91.2%）、その役割を果たす協力者には、保護者や商工会の代表者、知り合いの外国人、企業からの訪問サンタなどが挙げられた。それらが子どもたちの前に現れてプレゼントやお菓子を配ったり、子どもたちの質問に答えたり、一緒に歌を歌ったりダンスをしたりするようであった。

扮装サンタの登場の是非（質問7）に関しては、表1に示すように、多くは賛成意見（76.9%）であったが、反対意見（15.4%）やどちらとも言えないという意見（2.9%）も見られた。

賛成意見の理由は、①象徴的意味、②想像世界への没入、③経験の多様性、④リアリティ感覚、⑤幸福感情と驚異の念、⑥交流機会の提供、⑦夢を壊すという懸念に対する見解、⑧恐怖を誘発するという懸念に対する見解、⑨本物と偽物の区別に対する見解、という9つのカテゴリーに分類された。

象徴的意味：扮装サンタの登場の是非を問うよりもむしろ、サンタクロースやクリスマス行事そのものが持つ象徴的な意味合いについて言及したケース（例；「幼児期にしっかりと夢を持たせたいから」「今の子どもたちは夢がない子が多いので、少しでも夢を与えたいと思います」「子どもに夢を与える」「子どもたちの夢と想像の世界を膨らませ、幼いころの小さな思い出として大切にさせたい」「子どもに夢を！」「夢見る子どもの心を豊かに育てたい」）。

想像世界への没入：サンタクロースが目の前に登場することは子どもの想像世界への没入の後押しという点で効果があると指摘するケース（例；「子どもたちの目の前にサンタクロースの姿が現れることで、夢の世界に入れるから」「半信半疑の子どももその世界に浸りきっている様子がうかがえた」「サンタクロースが登場した途端、子どもたちの目が輝き、みんな吸い込まれるように見つめている。やはり子どもたちにはいろいろな夢やファンタジーなど経験して心豊かに育てほしいものである」）。

経験の多様性：サンタクロースとの直接的な触れ合いを通して多様な経験を得ることができると指摘するケース（例；「一緒に歌ったり、踊ったり、プレゼントを一人ずつ手渡してもらい、喜び触れ合うことで感性が豊かになっていくことと思います」「一緒に歌を歌ったり踊ったり触れたりすることで、子どもの夢も広がっていくと思います。話題も広がり、親子のお話のきっかけづくりにもなっています」）。

リアリティ感覚：サンタクロースを直接目にするこ

表2 予備の設定の内容と子どもたちの様子

予備の設定の内容	子どもたちの様子
<ul style="list-style-type: none"> <li>絵本や紙芝居の読み聞かせ、お話をする</li> <li>飾り付け（ツリー、タペストリー、リース、靴下、壁面構成など）</li> <li>製作（プレゼントを入れる袋や長靴、サンタへのお土産、ツリー、リース作り）</li> <li>クリスマスソングを歌う</li> <li>劇遊び、ごっこ遊び、ゲーム</li> <li>サンタに手紙を書く、質問を考える</li> <li>欲しいプレゼントについて話をする</li> <li>教職員による劇、歌、踊りなどを鑑賞する</li> <li>部屋を暗くする</li> <li>ローソクに火を灯す</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>期待感に胸を膨らませる</li> <li>喜んでいる、楽しんでいる</li> <li>興味を持っている</li> <li>期待して待っている</li> <li>ワクワクドキドキしている</li> <li>雰囲気を味わっている</li> <li>製作物や飾りを家に持ち帰って楽しんでいる</li> <li>サンタからの手紙を楽しみにしている</li> <li>家庭での行事につなげている</li> </ul>

とで存在のリアリティがより高まると指摘するケース（例；「疑う子どももやはり夢として少しでも見られるためには、目の前に現れる方がリアル」「サンタクロースが現れた時の子どもたちの目を見張るような表情を見ると、『サンタさんは本当にいて、僕（私）の家に来てくれるんだ…』という思いを一層深く感じているようで、夢や想像の世界が広がると思います」「本当にサンタクロースはいたんだ、そして保育園にも来てくれた、と喜びます。子どもたちは大変興味深い目をし、握手をしたり、質問に答えてもらったり、プレゼントをもらったり…と、どの子にも平等に夢をくれます」）。

幸福感情と驚異の念：サンタクロースに実際に会えた喜びや楽しさ、驚き、不思議さなど感情体験の重要性を指摘するケース（例；「子どもたちはサンタクロースについて半信半疑です。でも、信じたいという思いが強く、『サンタクロースは本当はおらんのよ！』と言っている子どもも、当日は大喜びです」「絵本やお話の中でしか見なかったサンタが登場するので、子どもたちは不思議そうでもあり、楽しみでもあるようです」「この時期与える絵本には、サンタクロースを題材にした内容はたくさんあり、子どもたちも楽しみにしています。その絵本のサンタクロースが実際に自分たちの前に現れた時の子どもの表情はとっても不思議そうで、またうれしそうです。どんな子どももこの時ばかりは食い入るように見つめています。そんな子どもたちを見てると、私たちまでうれしくなります」「絵本や紙芝居に出てくる人物に現実に見えることは、夢がかなうような喜びを感じられるから」）。

交流機会の提供：外国の人や地域住民と触れ合うことで、異文化について学んだり、地域と交流したりするよい機会になると指摘するケース（例；「日常、外国の人との触れ合いの場がないため、あえて外国の方にサンタになってもらうことで、身体的な違い、言語の違いなど体験する中でいろんなことを感じ取ってくれるのでよいと思う」「サンタクロースになってくださる方は、できるだけ絵本の中で見るサンタクロースに近い人に依頼しています。アメリカ、イギリス、オーストラリアの人に来ていただき、英語での会話（通訳者あり）で会を実施しています」「地域のお年寄りにサンタになってもらいます。その人との交流とも思っています」）。

夢を壊すという懸念に対する見解：扮装サンタの登場は子どもの夢を壊すことにはつながらずではないかという懸念に対する意見や対処について言及したケース（例；「現実に現れても、子どものサンタクロースへのイメージや夢、期待感がなくなっていくことは少ないと思われます」「サンタクロースが現れることについて問題はないと思う。現れ方や現れてからの内容

が大事であって、それはその園の保育方針などにすり合わせて、保育士が工夫し、子どもたちに伝えている。行事や会の中でどんなことを大事にし、子どもたちに伝えたいかは職員間で話しておくべきことで、内容、方法は保育士の個性、工夫で実施すればよいと思っている」「白いおひげ、赤い着物のサンタクロースのイメージは強いようですので、子どもたちの夢を壊さない程度での扮装はあってもよいかと思えます」「衣装を身につけるだけで、夢があると考えるのは怖いものです。しかし、何らかの方法で雰囲気作りは必要と思えます」）。

恐怖を誘発するという懸念に対する見解：扮装サンタの登場は、特に低年齢の子どもにとっては深刻な恐怖を引き起こす危険性があるという懸念に対する意見と対処について言及したケース（例；「小さい子で時々怖がる子がいるが、それも成長の一つの過程であり、後々までの影響はないように感じている」「年齢が低いと泣いたりするけれど、まだ純粋に信じきる子どもが多いので、夢を与えてよいのではないかと思う」「明るい雰囲気が普段より大切だと思うし、節分しかりだと思う。子どもたちが怖がるような会ではいけないと思う」「低年齢の子どもに、ただただ恐怖心を抱かせるだけという状態であれば害であるので、発達にに応じて取り組むことが大前提である。『夢を抱かせる』ねらいを達成させること」）。

本物と偽物の区別に対する見解：扮装サンタと本物サンタの区別について言及したケース（例；「毎年いろいろな方にサンタさんになって登場してもらっています。我が園では5歳児のみなので、本当のサンタクロースでないことはうすうすわかっていると思いますが、ときには夢を見ることも大切なのは…。意外と真剣に受け止めています」「子どもたちは商工会のサンタクロースは本物でないと思っている子が多い（あわてんぼうのサンタクロースと思っている子もいる）。本当のサンタはイブの夜に来ると思っているので」「子どもたちにはサンタクロースが赤い服を着て空飛ぶトナカイに乗って、夜にこっそりやってくるというイメージの世界・夢を大きく膨らませてやりたいと思っている。保育園のサンタさんは昼に個人ではなくみんなのいる昼間（明るい時）にみんなが使う玩具を持ってきてくれる、としている」）。

また、「どちらとも言えない」、反対意見、及び無回答の理由は、①夢を壊さないための配慮、②宗教的内容への配慮の必要性、③商業主義に対する不信感、④園行事としての本質的意義の見直し、⑤職員間の意見の不統一、という5つのカテゴリーに分類された。

夢を壊さないための配慮：扮装サンタ登場の功罪を十分に認識し、配慮する必要性について言及したケー

ス（例；「大人が扮装していることは園児には知らせないし、わからないようにしている。夢を壊さないように十分配慮している」「見ることで安心する子ども、見たことで疑問を深める子ども、見ないことで想像を膨らませる楽しさ…など、断言できないと思います」「サンタは空想の世界とは思うが、大人の扮装したサンタクロースでも演出等の工夫により、より想像を掻き立てる行事になる」「子どもたちの夢を育むために、話をしたり、絵本を読んだりするが、サンタが目の前に現れると、年長組の子どもなどは『ひげが違う』『そりがいない』など疑ってかかるため、あまり賛成ではない。C 電力がサンタを装ってプレゼントを持って来園して下さるので、本当のサンタはクリスマス・イブに来てくれるからね、という程度にしている」）。

宗教的内容への配慮の必要性：公立の教育機関・施設として特定の宗教を支持するような印象を世間に与えないように配慮する必要性について言及したケース（例；「サンタクロースをどのように扱うかで宗教的になるので、公立幼稚園では特に気を付けなければならない」「クリスマス、サンタクロースについて、イベント的でなくきちんと知らせる必要があると思いますが、本園では宗教の取り上げは行っていません」）。

商業主義に対する不信感：サンタクロースやクリスマス行事が現代社会では商業主義に傾倒している点について不信感を表明したケース（例；「はっきり賛成、反対とは言い切れない。賛成…1年間を通して他の行事同様、雰囲気盛り上げる。反対…商業的な部分がある」「よく意味も分からないうちに商業主義に巻き込まれてしまうことになるので」「『絶対にこうする』という見方はないのですが、あまりきらびやかに商業的なクリスマスや、サンタクロースのイメージは、子どもたちには印象付けたくないと考えています」「子どもたちが年々夢を持ってなくなってきている。世の中、マスコミがあまりにも騒ぎすぎる」）。

園行事としての本質的意義の見直し：園行事として慣例化した内容について、改めて見直す必要性について言及したケース（例；「毎年サンタクロースの登場で子どもたちはプレゼントをもらえるという期待を持っている。サンタクロースが登場することで会が盛り上がる。半面、毎年行っているからということでクリスマス会を行っているが、子どもたちにとって本当に必要な行事なのか疑問がある。本質的にクリスマスとは何か、イメージをもっと広げられるような会にと思うことがある」）。

職員間の意見の不統一：記入者個人の意見としては賛成の場合もあるが、園の職員全体の意見としては統一されていないという実態について言及したケース（例；「どちらとも言えないというのがアンケート記入

者個人の考えですが、やはり子どもに夢を持たせるというのは大事なことだと思っている」「サンタクロースにおいては職員間でも賛否あり。プレゼントを持ってきてくれる人として楽しみにしています」「個人的に、サンタクロースは夢があって大好きである。街中にあふれるサンタの格好をした大人は大人でそれもよしだし、あるいは本物のフィンランドのサンタさんとは別という意識（本物は別にいるのだ！という）が子どもにはあるのでは？ またそういう風に思っしてほしいと思っています」）。

以上のように、クリスマス行事で大人が扮装したサンタクロースが子どもの前に登場すること、あるいは園でクリスマス行事そのものを行うことに関しては、リスク要因として子どもの夢を壊す可能性や恐怖誘発の可能性、宗教色の強さ、商業主義的傾向など、様々な懸念や心配の声が挙げられたものの、基本的には肯定的意見がほとんどであることが示された。具体的には、それらが子どもの夢を象徴的に体現し得ること、想像世界への没入を促進し得ること、経験の多様性を保障し得ること、存在のリアリティを高め得ること、幸福感情や驚異の念を与え得ること、異文化や地域社会との交流機会を提供し得ることなどが挙げられた。全般的に、扮装サンタ登場の演出や園でのクリスマス行事の実施は、子どものサンタクロースに対する認識に否定的な影響を及ぼすものではないという点で見解は一致していたと言えよう。

## 文 献

- Blair, J.R., McKee, J.S., & Jernigan, L.F. (1980). Children's belief in Santa Claus, Easter Bunny, and Tooth Fairy. *Psychological Reports*, 46, 691–694.
- Boerger, E. A., Tullos, A., & Woolley, J. D. (2009). Return of the Candy Witch: Individual differences in acceptance and stability of belief in a novel fantastical being. *British Journal of Developmental Psychology*, 27, 953–970.
- Prentice, N.M., Manosevitz, M., & Hubbs, L. (1978). Imaginary figures of early childhood: Santa Claus, Easter Bunny, and the Tooth Fairy. *American Journal of Orthopsychiatry*, 48, 618–628.
- Prentice, N. M., & Gordon, D. A. (1986). Santa Claus and the Tooth Fairy for the Jewish child and parent. *Journal of Genetic Psychology*, 148, 139–151.
- Prentice, N. M., Schmechel, L. K., & Manosevitz, M. (1979). Children's belief in Santa Claus: A developmental study of fantasy and causality. *Journal of the American Academy of Child Psychiatry*, 18, 658–667.
- Rosengren, K. S., Kalish, C. W., Hickling, A. K., & Gelman, S. A. (1994). Exploring the relation between preschool children's magical beliefs and causal thinking. *British Journal*

*of Developmental Psychology*, 12, 69–82.

Sharon, T., & Woolley, J. D. (2004). Do monsters dream?:

Young children's understanding of the fantasy / reality distinction. *British Journal of Developmental Psychology*, 22, 293–310.

杉村智子・原野明子・吉本史・北川宇子. (1994). 日常的な想像物に対する幼児の認識：サンタクロースは本当にいるのか？ 発達心理学研究, 5, 145–153.

富田昌平. (2002). 実在か非実在か：空想の存在に対する幼児・児童の認識. 発達心理学研究, 13, 121–134.

富田昌平. (2009). 幼児におけるサンタクロースのリアリティに対する認識. 発達心理学研究, 20, 177–188.

Woolley, J. D., Boerger, E. A., & Markman, A. B., (2004).

A visit from the Candy Witch: Factors influencing young children's belief in a novel fantastical being. *Developmental Science*, 7, 456–468.